赤野井湾について

赤野井湾は、びわ湖『南湖』の東側に位置する内湾である。

湾内には、8 本の河川が流れ込み、その流入部などには、びわ湖の湖岸道路や湖岸堤によってできた内湖が形成されている。湾の集水域は、水田を主体とした農地が 6 割、宅地・工業用地・道路等が 4 割を占める。また、集水域にある守山市は、京の隣の宿場「中山道守山宿」として古くから栄え、かつてはゲンジボタルの群生地として全国に名を馳せた。

赤野井湾の現状

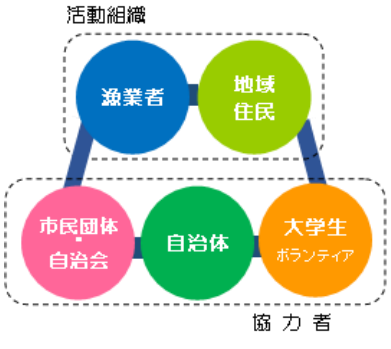
昭和の戦後近くの赤野井湾は、水が飲めるほどきれいで、春先には多くの魚が産卵に押し寄せ「赤野井湾に魚島ができる」とまで言われた。しかし、大水害を防ぐ目的で実施された野洲川の流路変更、湾北部の埋め立て、湾口部の消波堤建設など複合的要因により、極めて閉鎖性の強い環境となり、平成 6 年にはアオコが大量発生するなどの問題が生じるようになった。

また、平成 20 年代前半には新たな課題が浮上した。それは、①ヨシ帯など在来植物を駆逐する外来植物オオバナミズキンバイの大量繁茂、②内湖や湾内の湖底に堆積するプラスチックゴミ類等の表面化である。

外来植物オオバナミズキンバイの大量繁茂は、ヨシ帯などの水質浄化機能や生物多様性機能の劣化を促す。また、湖底に堆積した大量のゴミは、魚介類の生息や増殖に悪影響を及ぼす。加えて、漁業活動の障害になったり、底質悪化につながったりする。こうした新たな課題への対策が急務となっている。

組織の設立と活動の目的・方針

上記課題の中、守山市環境政策課と、漁業者や市民団体等の地域住民が連携して、平成 24 年度に「赤野井湾再生プロジェクト」を発足した。また、その活動を具現化するために、湾内の水産資源の回復を望む漁業者が主体となって平成 25 年度に「取り戻そう再生赤野井湾」（以降、当該組織）を設立した。



湾内や内湖の水・底質改善による水産資源の回復

① 水辺の外来植物対策

大繁茂するオオバナミズキンバイを除去し、健全な水辺環境の回復を図る

② 湖底ゴミの対策

湖底や湖面、水辺に浮遊・堆積するゴミを除去し、湖底環境の改善を図る

みんなで取り組む赤野井湾の再生

（1）水辺の外来植物対策

外来植物オオバナミズキンバイは、中南米原産の水生植物で、平成 26 年に「外来生物法」に基づく「特定外来生物」に指定された。赤野井湾では、平成 21 年にはじめて発見され、その後、爆発的に繁殖した。

本種は、葉や茎の断片からも繁殖することができ、その除去は機械も用いるが、最終的には手作業で根こそぎ除去するしかない。

活動当初の当該組織メンバーは 30 名程度で、除去作業に要す人員不足が大きな課題であった。そこで、赤野井湾の生物多様性の回復を目指す市民団体、市等が主催した環境フォーラムでこの問題を知った学生ボランティア団体、自治会、企業などと一緒に『オオバナミズキンバイ除去プロジェクト』を立ち上げ、情報共有や各自取り組みへのサポートなど、一緒に対策を講じることにした。

当該組織の除去活動は、5～12 月にかけて実施し、月に 7～8 回行う。また、市民団体や学生ボランティア団体等が主体で活動を実施する際も漁業者として用船するなど協力している。

（2）湖底ゴミの対策

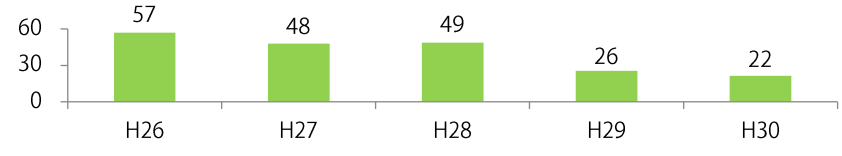
湖底ゴミの堆積は、漁業者の間で古くから問題視されており、平成初頭から湾内に浮遊・堆積するゴミ類の除去を随時行ってきた。しかし、流入するゴミに対して除去量が追いつかず、現在、その問題が顕在化し、特にシジミ等の二枚貝資源に大きな影響を与えるようになった。

そこで、当該組織では、湖底ゴミの対策を強化し、湖底環境の改善を図ることにした。活動は、周年実施し、月 3 回程度行っている。

活動の効果と今後の方針

オオバナミズキンバイの大繁茂は、当該組織の活動や多様な組織等と連携を図った取り組みにより、現在、収束してきている。

湖底ゴミ対策については、新たなゴミが沖合や用水路を含む流入河川から加入しており、効果がなかなか得られていない。こうした課題から、現在、オオバナミズキンバイ除去で連携を図る組織等と一緒に、本対策についても取り組みをスタートすることにした。

自分たちの活動だけでなく、こうした多様な主体と連携しながら、今後も取り組みを展開し、赤野井湾の再生を目指していきたい。

守山市（南湖）におけるオオバナミズキンバイ最大繁茂面積（千m²）